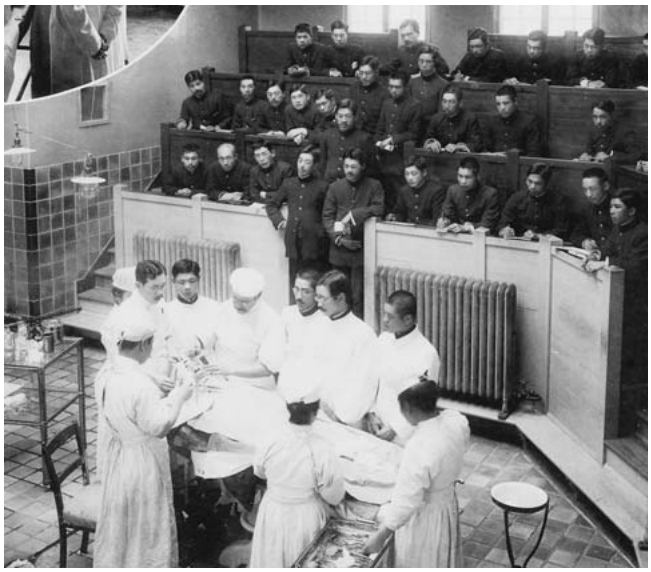
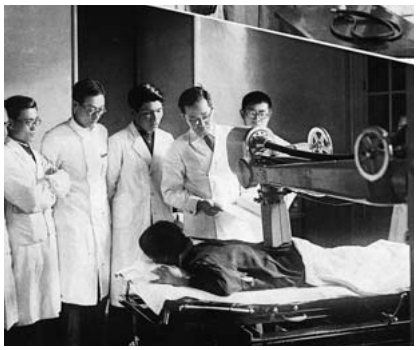
前身校点描

明治45年、金沢医科大学は市内広坂から現宝町キャンパスに移転、新築完成直後の本館建物。



大正後期、附属病院内臓外科の実習風景。

昭和初期、薬学専門部の定性分析の学生実習。



昭和10年代、最新鋭のレントゲン診断。

第四高等学校の最も古い写真で、明治28年秋季陸上大運動会での記念撮影。

明治期の四高校舎群。

昭和期の授業中の1コマ。

四高記念祭大運動会後の全寮ストーム。

石川師範学校の最古の卒業記念写真（明治24年の撮影）。

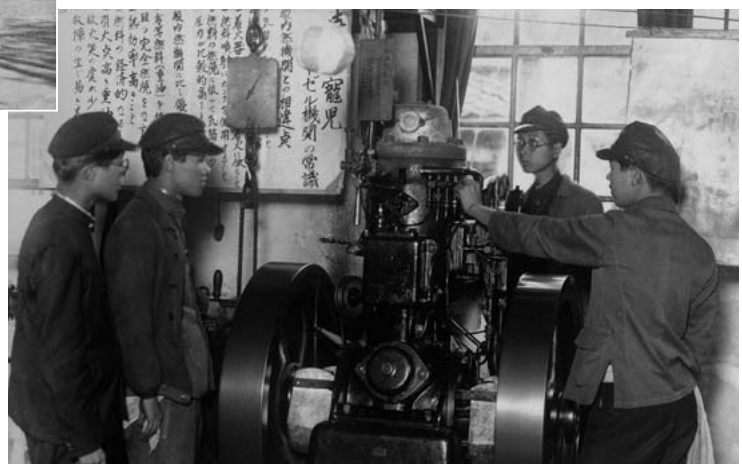
戦時期の農場実習中、未来の女性教師たちの珍しい光景。

放課後、のんびりとした師範学校生たち。

金沢高等師範学校第1回入学式（昭和19年5月）。

金沢高等工業学校は大正9年に設置、2年半後に華々しく開校式典がおこなわれた。

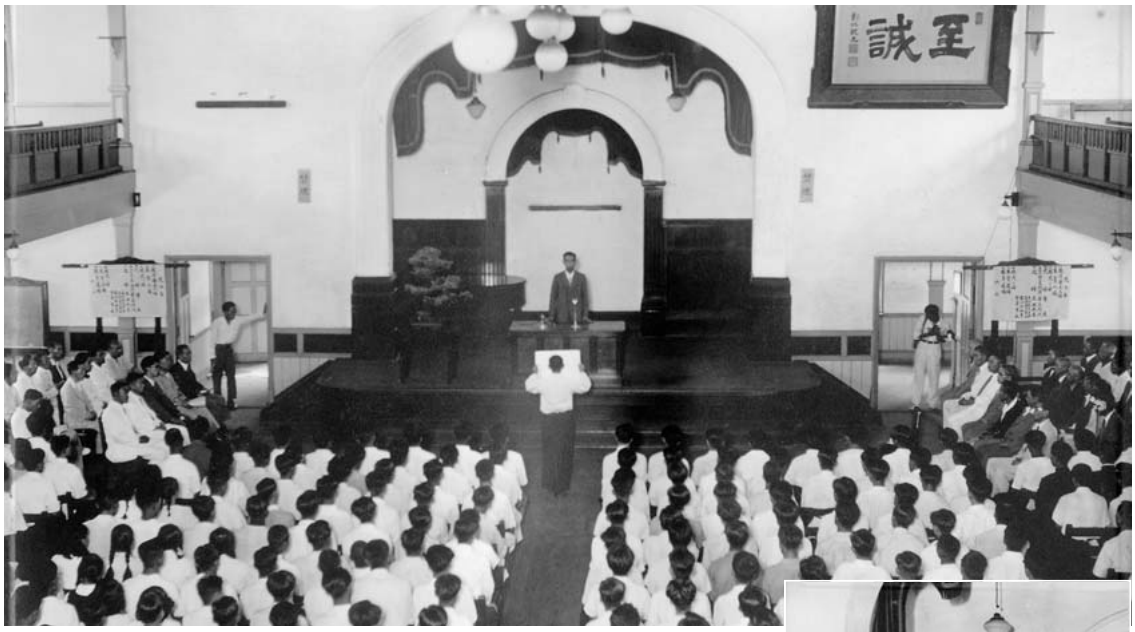
大正末年の測量実習、背景は兼六園内の成巽閣。



昭和前期、機械に立ち向かう高工生たち。

学園内にも深まる戦争の影。

金沢大学の50年



新制金沢大学は昭和24年7月25日第1回の入学式を挙行した。

ＧＨＱ石川軍政隊長の入学式祝辞。

女子学生の姿も目立ち、珍しい夏服での入学式。

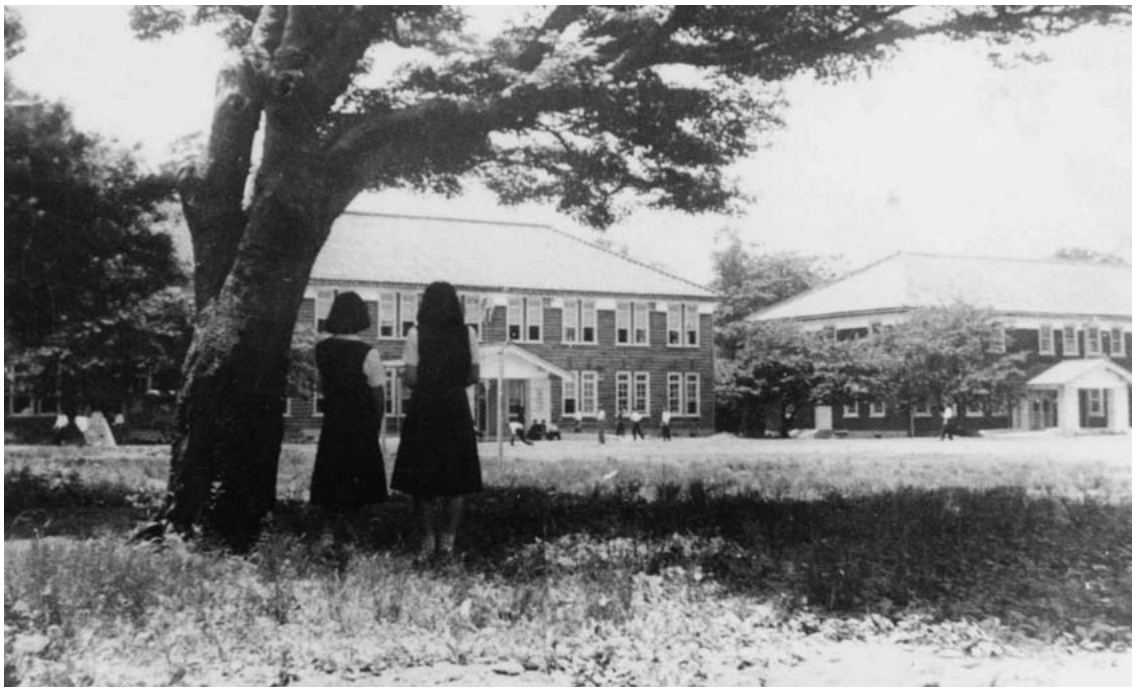
新制大学初の第1回生卒業式。

新制学部の実習に臨む男女共学の学生たち。左は薬学部の薬品製造実習、右は教育学部の野外実習。

開学十周年を迎え、昭和34年11月記念式典が盛大に行われ、初めて室生犀星作詞の校歌が披露された。

理学部創設当初の仙石キャンパスと校舎。

旧金沢城内は第九師団から開放されて法文学部・教育学部・教養部と事務局の大学キャンパスに様変わりした。それを機会に石川門の改修に着手（昭和28年4月）。



教養部の運動場脇でクラスメートの野球遊びを眺める女子学生。

昭和20年代後半、敗戦後の混乱と戦後復興の中で、学生たちは若々しく、そしてたくましく活躍した。

金沢大学は昭和30年代に相次いでVIPを迎えたが、昭和天皇・皇后の来学は同33年10月22日のことであった。

昭和30年3月、初の国際交流相手校となったペンシルバニア大学ハンウェル学長と戸田学長。

昭和37年4月25日、駐日米国大使ライシャワー夫妻が来学し、石橋学長と懇談。

昭和30年代後半、社会的な大ニュースが大学を大きく揺さぶった。いわゆる「60年安保」では、学生たちだけではなく、教官も金沢市内のデモに参加した。続く「三八豪雪」は校舎をすっかり埋めてしまった。

風格のある小立野の工学部本館建物と実験室棟（昭和30年代）。

整備が完了した宝町キャンパス全景（昭和40年代中葉）。

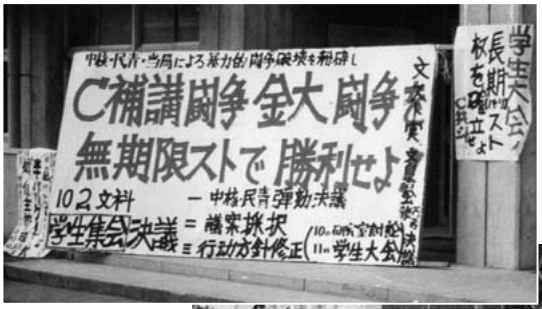
がん研究所の前景。

城内に端正な姿を見せる法文学部校舎（昭和40年代初め）。

新装なった城内の附属図書館（昭和40年代中葉）。

兼六園を望める教育学部棟。城内で唯一3階建ての校舎。

建設・増築ラッシュで発展中の小立野工学部キャンパス。



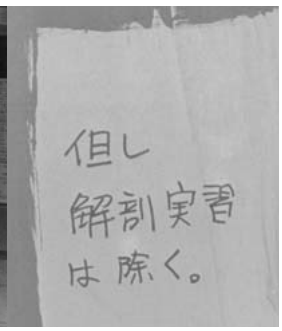
〝インターンやらぬ〟医学生連合が宣言

全日本医学生連合（斎藤芳雄委員長、四十六医科系大学、一万八千人加盟）は、さきに「医師実地修練および医学教育等検討打ち合わせ会」（八人委、関谷手島委）が現行インターン制度を廃止するといいながら、大学卒業後、医師国家試験にこぎつけるまで二年間実地研修を否する宣言を三十一日発表した。

学生側の主張は、八人委の意見書が現行インターン制度を廃止するといいながら、大学卒業後、医師国家試験にこぎつけるまで二年間実地研修しなければ独立して医業を営めないような医師免許は〝仮免許〟である、とっている。

さらに一年間実地研修しなければ独立して医業を営めないような医師免許は〝仮免許〟である、と

昭和40年代後半以降、いわゆる「大学紛争」の波は金沢大学にも押し寄せた。授業ボイコット・建物封鎖、団交と疾風怒涛の時代。



昭和59年4月、大学院経済学研究科が設置され、いよいよ全学あげて博士課程新設に向けてスタート。

昭和60年4月、待望の自然科学研究科（博士課程）の開設。

青野学長による第2回博士号授与式。

狭く雑然とした城内キャンパスだったが、懐かしい木造の部室、桜並木、食堂…

金大評議会 未明まで移転論議

延々十余時間 苦悩の最終局面

推進・反対派、鋭く対立

金子学長「難航」とぐったり

キャンパスの総合移転を目指す金沢大学（金子孝学長）は、五十六年度国等整備費のタイムリミット含りの十七日午後、教学計画検討委員会と臨時評議会を相次いで開き、翌日午前の総合移転実施特別委員会（委員長・鈴木一郎文学部長）からの報告を受けて、金沢市の角間地区を最終的に移転候補地とするかどうか、深夜まで大詰めの議論を続けた。しかし、学内意見調から移転反対論、慎重論が強く出て特別委自体が統一見解にまとまらなかったことと併せ、城内教職員との関係を崩していない教職員の取り扱いについて評議会は難航、金大移転問題は移転か残留かを迎えて十八日未明まで苦悩の激論を続けた。金子学長は十九日に文部省に出向き、これまでの経過を報告するとともに経費の確保を行う。

大詰めを迎えた移転問題を話し合う臨時評議会＝金沢市丸の内、金大本部で

翌日午前九時から開かれた評議会では「角間地区の方が相対的に金川地区より有利」としたものの、角間を候地と結論することは避けた。結局、「条件付きながら角間を候地とする意見が多かった」とし、これに「角間は適地ではない」との反対論と「現段階では判断不可能」とする慎重論を少数意見として併記、そのまま評議会員会である教学計画検討委員会に報告した。

これを受けて、翌日午後一時半から臨時評議会が開かれた。しかし、評議会では、マ移転は既に評議会で正式決議しており、今さら後ろ向けない又マ、国の予算を通したら、総合移転のチャンスは当分ないーとする移転推進派と教職員が城内残留を要求しない以上、総合移転はあり得ないもっと議論を尽くして候地を選ぶべきだ」との移転慎重派が対立、会議は一致点を見いだせないまま深夜までもつれ込んだ。

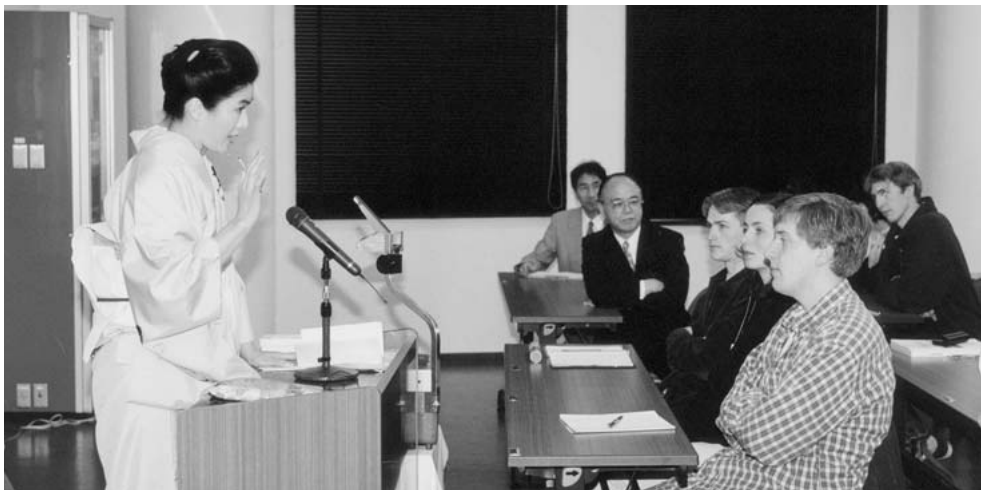
最終局面でも城内残留に固執する教職員から移転反対・慎重派と「きょうがタイムリミット」として角間一本化を迫った金子学長などの移転推進グループが鋭く対立

事務局移転を最後に、お別れのあいさつをする金子元学長。

激論と苦悩の末に移転決定、角間キャンパスに新天地を求める。

角間キャンパスでの新しい大学の活動、外国語教育研究センター開設。

一層充実した総合情報処理センター。



留学生センターでの新機軸の日本文化教育。

在学生・留学生の交流会の楽しいひととき。